邑、今云飫悶迺奇訛也、皆謂親母爲於毛、但就乳養有是名、淺人謂於毛母之古名、於不關係乳養之處、亦謂母爲於母者非是、○略中　廣韻、嬭、乳也、廣雅、嬭、母也、史記正義、嬭母、乳母也、並此義、按乳母謂乳養小兒者、乳本訓生子、其乳養者轉注也、廣本無文字集略以下正文十字、○略中　唐書云、武德式十四卷、貞觀式三十三卷、永徽式十四卷、垂拱式二十卷、開元式二十卷、今皆無傳本、按所引日本紀、謂豐玉姫歸海鄉、留其女弟玉依姫持養小兒、見神代紀下、據所引師說、女乃度是妻妹之急呼、以其持養小兒、後世泛爲保母之稱、後撰集雜戀歌小序、及枕冊子所言、女乃度是也、是可以證女乃度非乳育者名、則訓乳母爲女乃度非是、新撰字鏡、阿妳乳母、又云女乃止、顯宗紀亦乳母傍訓女乃止、其誤與此同、日本紀以下十七字、舊及山田本、尾張本、昌平本、曲直瀨本、下總本皆無、獨廣本有之、今附存、

〔伊呂波字類抄女人倫〕乳母メノト　傳姆嬭　已上同

〔倭訓栞前編十五知〕ちおも　神代紀に乳母をよめり、倭名抄に嬭母ともみえたり、今うばといふは、嫗の義なるべし、

〔倭訓栞前編三十二米〕めのと　倭名抄に乳母をよみ、めのおとゝもいふは、妻の妹の義也といへり、玉依姫の故事より起りし事、神代紀に見えたり、新撰字鏡に嬭をよめり、

〔倭訓栞前編四十五於〕おち。　乳母をいふは御乳の義成べし、春宮には御乳の人と稱し、禁裏には大乳人と稱す、

〔萬葉集十二古今相聞往來歌〕正述心緒

綠兒之、爲社乳母者、求云、乳飲哉君之、於毛求覽、

〔萬葉集略解十二上〕今本爲社と有りて、すもりめのと、訓るは何事ぞや、一本社に作るをよしとす、乳母は知毛とも訓べけれど、同じ事を下に於毛と書るに依て、上をもおもと訓也、訓と意を知らするとて、二樣に書るものなれば也、母をおもといふ事は集中に多し、乳母をば知於毛